

建設省 土木研究所 正 建築学一
 日本鋼管 正 前田直寛
 日本鋼管 正〇 中村公信

【まえがき】 地中埋設管、沈埋トンネル、等の中構造物において、各構造要素の間に特殊な材料あるいは機構を挿入することによって耐震継手とし、構造物本体に発生する地震時の断面力を低減しようとする試みがなされている。その際、継手にどの程度の許容変位量を設定するかは、継手の設計において重要な問題となる。そこで、本報告では、応答変位法の考え方に基づいて、継手の変位量を算定する方法について述べ、設計のための資料を提供する。

【モデル化】 断面キ法に比べて長手方向に細長い地中構造物では、構造物固有の振動は起りにくく、周辺地盤の変形に追随した挙動を示すと言われている。そこで、構造物本体を質量を持たない弹性床上の梁とし、地盤のバネを介して地動が入力するような力学モデルを考える。簡単なため、構造物は長手方向に直線的とする。

地震波は、構造物に沿って伝播する継波および横波を考える。前者は軸方向振動、後者は曲げ振動と起こる。任意の入射角を有する波は、二つの波に分解して別々に考えればよい。波の形は正弦波とするが、不規則波の場合にはノーリエ変換を用いることにより、单一正弦波の問題に帰着できる。

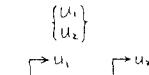
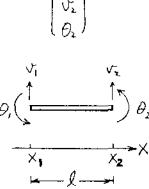
継手としては、伸縮、剪断、曲げの3種類を想定し、いずれも弹性バネで表現する。継手の変位は、このバネの変形量（隣接構造要素端の相対変位）として定義する。

【簡易計算法】 継手のバネ定数を0とすると、継手によって分割された各構造要素は互に連成しないから、解析的に解くことが容易となる。結果を次頁にまとめる。

【マトリックス法】 継手のバネ定数が0でない場合、あるいは各要素の諸量が一様でない場合、マトリックス構造解析によらざるを得ない。調和進行波を受ける弹性床上梁要素の剛性行列、荷重ベクトル、等を下表に示す。これらを一般の変形法と同様の手順にしたがって重ね合わせを行なう。さらに継手バネの剛性行列を付加すれば、系全体の釣合式が得られる。結果の一部を次頁に図示する。継手のバネ定数が0でない場合の継手変位係数は、すべての継手の変位振幅のうちで最大のものを無限弹性床上梁の変位振幅で除した値として定義する。

【謝辞】 東大・久保慶三郎教授を委員長とする「トンネル耐震継手技術委員会」の委員の方々に謝意を表する。

【参考文献】 建設省土木研究所、「新耐震設計法(案)」昭和52年3月

変形	剛性行列	荷重ベクトル	変位ベクトル
軸方向	$[K] = \frac{EA}{l} \frac{\beta}{\sinh \beta} \begin{bmatrix} \cosh \beta & -1 \\ -1 & \cosh \beta \end{bmatrix}$ $\approx = \beta = \sqrt{\frac{k}{EA}} l$	$\{P\} = [K] \begin{bmatrix} u_0 e^{i\delta_1} \\ u_0 e^{i\delta_2} \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} iQ_0 e^{i\delta_1} \\ -iQ_0 e^{i\delta_2} \end{bmatrix}$ $\delta_j = (2\pi/L) \cdot X_j \quad (j=1,2)$ $u_0 = \alpha Z_0$ $P_0 = (\pi/L) \cdot EA u_0$	$\begin{bmatrix} u_1 \\ u_2 \end{bmatrix}$ 
曲げ	$[K] = \frac{EI}{l^3} \frac{2\beta^3}{\sinh^2 \beta} [A][B][A]$ $\approx = \beta = \sqrt{\frac{k}{4EI}} l$ $[A] = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{bmatrix}$ $C = \cos \beta$ $Sh = \sinh \beta$ $Ch = \cosh \beta$ $[B] = \begin{bmatrix} 2(S-CtSh-ch) & S^2ch+C^2sh^2 \\ S^2ch+C^2sh^2 & -2(S-ch+C-sh) \\ -2(S-ch+C-sh) & 2(S-C+sh-ch) \\ 2S-sh & S-ch-C-sh \end{bmatrix}$ $(sh-ch-S-C) \quad sym.$	$\{P\} = [K] \begin{bmatrix} v_0 e^{i\delta_1} \\ i\theta_0 e^{i\delta_1} \\ v_0 e^{i\delta_2} \\ i\theta_0 e^{i\delta_2} \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} iQ_0 e^{i\delta_1} \\ -M_0 e^{i\delta_1} \\ -iQ_0 e^{i\delta_2} \\ M_0 e^{i\delta_2} \end{bmatrix}$ $\delta_j = (2\pi/L) \cdot X_j \quad (j=1,2)$ $v_0 = \omega Z_0$ $\theta_0 = (2\pi/L) \cdot V_0$ $M_0 = (2\pi/L)^3 \cdot EI V_0$ $Q_0 = (2\pi/L)^2 \cdot EI V_0$	$\begin{bmatrix} v_1 \\ \theta_1 \\ v_2 \\ \theta_2 \end{bmatrix}$ 

注) 上表において特に説明のない記号は、次頁と同じ。

变形	綫手ハネ定数を0とした場合の綫手変位量の計算簡便法	無次元ハーラーの表現	
		綫手変位量	綫手変位係数
軸 方 向	$\ell = EA$: 繩手物の剛性 $k = \text{綫手の剛性}$ $L = \text{地盤の長さ}$ $Z_0 = \text{綫手の変位振幅}$	$\beta = \sqrt{\frac{E}{EA}} \cdot \vartheta = \frac{2\pi \cdot \vartheta}{L}$ $\alpha = \frac{1}{1 + (\beta/\beta_0)^2}$ $U_0 = \alpha Z_0$ $\text{無限半径上梁の変位振幅} U_J = \frac{2\pi \cosh \beta - \cos \beta}{\beta \sinh \beta}$ $ \beta = \mu_0 \vartheta$	$\mu = \sqrt{\frac{k}{EA}} \cdot L = \frac{2\pi \vartheta}{\gamma}$ $\nu = \frac{\vartheta}{L} = \frac{\gamma}{2\pi}$ $Z_0 = \frac{\beta_0 \vartheta}{\mu_0}$ $\beta_0 = \frac{2\pi}{\gamma}$ $\mu_0 = \frac{\gamma}{2\pi}$
曲 “”	$\ell = EA$: 繩手物の剛性 $k = \text{綫手の剛性}$ $L = \text{地盤の長さ}$ $Z_0 = \text{綫手の変位振幅}$	$\beta = \sqrt{\frac{E}{EI}} \cdot \vartheta = \frac{2\pi \cdot \vartheta}{L}$ $\alpha = \frac{1}{1 + (\beta/\beta_0)^2}$ $U_0 = \alpha Z_0$ $\text{無限半径上梁の変位振幅} U_J = \frac{2\pi \cosh \beta - \cos \beta}{\beta \sinh \beta}$ $ \beta = \mu_0 \vartheta$	$\mu = \sqrt{\frac{k}{EI}} \cdot L = \frac{2\sqrt{EI}}{\gamma}$ $\nu = \frac{\vartheta}{L} = \frac{\gamma}{2\pi}$ $Z_0 = \frac{\beta_0 \vartheta}{\mu_0}$ $\beta_0 = \frac{2\pi}{\gamma}$ $\mu_0 = \frac{\gamma}{2\pi}$